神戸女学院大学論集　第60巻第1号　Kobe College Studies Vol. 60 No. 1（June 2013）

現代思想のパフォーマンス

―ジャン・ボードリヤール―

案内編＆解説編（2）

難波江　和　英

Performance of Contemporary Thought:

Jean Baudrillard

Introduction & Interpretation (2)

NABAE Kazuhide

神戸女学院大学 文学部 総合文化学科 教授
連絡先：難波江和英　〒662-8505　西宮市岡田山4-1 神戸女学院大学文学部総合文化学科
k-nabae@mail.kobe-c.ac.jp

要　旨

本稿は、「現代思想のパフォーマンス―ジャン・ボードリヤール―案内編＆解説編」の第二篇として、現代の視点からジャン・ボードリヤールの『誘惑について』に託されたメッセージを解読する試みである。

第一篇では、『物の体系』から『消費社会の神話と構造』を経て『シミュラークルとシミュレーション』へ至るプロセスを対象とした。この第二篇では、ポストモダニズムのモードからゲームのモードへの架橋となる理論書として『誘惑について』を対象とし、「生産」の概念を無効にする新しい概念として「誘惑」を打ち出したボードリヤールの戦略を説明する。

『誘惑について』は、「性の黄道」、「表層的な深淵」、「誘惑の政治的運命」という三部から構成されている。これらについて、それぞれ焦点を定め、ボードリヤールの「誘惑」を多角的に再構成して、その現代思想としての意義を提示する。第一部では、「誘惑」と「女性的なるもの」、「女性的なるもの」と「シミュレーション」、「誘惑」と「生産」、第二部では、ラカンへの批判、「真理」と「シミュレーション」、キルケゴールの『誘惑の日記』、第三部では「法」と「規則」をポイントにする。

第一部では、精神分析が性の言説を生み出す「生産」の装置であることを指摘し、その支柱となる「男性原理」と「女性原理」の二項対立を内から崩す「無＝意味」の働きとして「女性的なるもの」を論じる。第二部では、ラカンの精神分析もまた、意味の生成という「生産」の原理を継承していることを指摘し、「意味の吸収」としての誘惑を対置する。そこから、真理の実在は、真理の中心となる「空虚」によって保証された擬制であることを論証する。第三部では、「生産」の原理を「法」と規定して、必然性、不可逆性、禁止、抑圧、直線の連続性、目的性、正当性にその特徴を見ると同時に、「誘惑」の原理を「規則」と想定して、偶然性、可逆性、循環、反復、無目的性、眩暈、儀礼にその特徴を見る。

結論として、現代の消費社会で、「誘惑」の衰弱を「誘惑」の運命として生きる現代人の運命を描出する。

キーワード：誘惑、生産、女性的なるもの、シミュレーション、規則

Abstract

This is the second part of an attempt to draw a critical portrait of the French sociologist and philosopher, Jean Baudrillard. The focus is centered on the landmark achievement of his work, *Seduction*, in order to define his vision of seduction as a strategic antidote against the outmoded idea of production.

Seduction consists of three parts, 'The Ecliptic of Sex,' 'Superficial Abysses,' and 'The Political Destiny of Seduction.' This monograph aims to integrate critical views of the most essential issues in each part to the whole image of Baudrillard as a seducer: "seduction" and "the feminine," "the feminine" and "simulation," "seduction" and "production" in the first part, Jacques Lacan's psychoanalysis, "truth" and "simulation," and "seduction" in *Diary of the Seducer* by Søren Kierkegaard in the second part, and "the Law" and "the Rule" in the third part.

An analysis of these issues brings the multifaceted structure of Baudrillar's "seduction" into light. First, traditional psychoanalysis is defined as an epistemological apparatus of production to formulate the discourse of sex, whereas the new idea of "the feminine" functions as the nullification of meaning to undermine from within the dual assumption of masculinity and femininity in psychoanalysis. Second, Lacan's psychoanalysis also can be seen as a sequential variation of the production model, and is therefore subject to the absorption of meaning rendered by the vision of "seduction." The presence of truth is then proved to be a "meaningful" construct guaranteed by the void allegedly placed as its center. Third, the idea of production is identified as "the Law," and the idea of "seduction" as "the Rule." The former is characterized by inevitability, irreversibility, prohibition, oppression, linear sequence, teleology, and legitimacy, whereas the latter by arbitrariness, reversibility, cycle, repetition, non-purpose, vertigo, and ritual.

In conclusion, consumers in the contemporary consumption society are destined to accept the doom of "seduction" as it is abated by the highly-developed simulation technology that reduces the binary opposition between real and unreal into hyperreal or floating signs of desire.

Key words: Seduction, production, the feminine, simulation, the rule

今回はジャン・ボードリヤールの誘惑論である。最初に、ここまでの流れの起点を説明しておこう。

ボードリヤールは、『物の体系』(1968年)から『消費社会の神話と構造』(1970年)を経て『象徴交換と死』(1976年)に至るまで、まるで変奏曲のように、同じメッセージを繰り返し提示した。それはこういうことである。現代の消費社会では、人は自然の欲求を満たすために物自体を消費するのではなく、社会の欲望を自然の欲求と取り違えるように、商品となった記号を消費する。このメッセージの主題は「物の確実性の喪失」、つまり、存在の根拠としての物は失われたということだろう。いや、失われたのは、物自体という概念への信頼によって支えられていた他の概念も同様である。たとえば、実体、実在、現実、歴史、主体、身体、そして生産。私たちはすでに、そうした概念によって意味を帯びてきた世界を抜けて、いまや「透明の時代」(『シミュラークルとシミュレーション』229)を生きている。それどころか、意味への信頼まで、記号のシミュレーション操作によって蒸発した果ての時代を。

「もはや意味に希望はない。これはきっとよいことである。意味とは死すべきものだから。そこで意味は束の間の支配を押しつけて、啓蒙思想の支配を課すために、現象(les apparences)を消滅させようと望んだ。しかし現象は不死である。意味あるいは無=意味のニヒリズムにさえ屈しない。まさしくここに誘惑は始まる。[1)]」(『シミュラークルとシミュレーション』234)

ボードリヤールの論点は明らかだろう。啓蒙思想とは、現象に意味を与えることによって、意味(理性)の枠内へ現象(理性ではとらえきれないもの)を取りこんで、人間の進歩や社会の改善を夢見る思想である。しかし、現代の消費社会を支配している現象を、意味という理性のツールでとらえることはできない。たとえばディズニーランドは、もはや商品として意味をもつ生産物ではなく、娯楽として消費される超現実(ハイパーリアリティ)の現象である。それゆえ、「ディズニーランドとは?」と問うても意味はなく、「夢の国」という意味まで、娯楽の記号として、ディズニーランドというシミュレーション世界へ拡散してしまう。

ここからもわかるとおり、現象は意味と違って、浮かんでは消え、消えては浮かんで、「ニヒリズム」に陥ることも、「不死」に惑うこともない。現象は意味の網をかいくぐり、すり抜け、ズレを繰り返し、循環する。物の確実性から記号の浮遊性へ、商品の生産からシミュレーションの操作へ、意味の死から現象の不死へ。ボードリヤールは、まさにその転位から「誘惑は始まる」と言う。それはどういうことだろう。

*

ボードリヤールの誘惑論は、『フーコーを忘れよう』(1977年)と『誘惑について』(1979年)で花開く。前者はタイトルこそ「フーコー」の名前を冠しているが、ミッシェル・フーコー、ジル・ドゥルーズ、ジャン=フランソワ・リオタールの思想を流れている根本原理を批判しな

がら、独自の誘惑論を展開している。他方、後者は前者の内容と表現を反復しながら、より完成度を高めているので、それを基にしてボードリヤールの誘惑論を見ていこう。

但し、『誘惑について』は意味に回収されることを拒むように書かれていて、読者の理解をしきりに挫折させる。その点で、本書を読むことは、意味という理性のワナから逃れて、「誘惑」のなんたるかを感じ取らせる修辞的シミュレーションへの挑戦になっている。それゆえここでは、あえて文学作品を読むように、序論にあたる部分から精読しておこう[2)]。この導入部は、本論への必須のガイドになっているからである。その内容は、（1）ボードリヤールの「誘惑」の含意、（2）「誘惑」と「女性的なるもの」（le féminin）の関係に大別される。それではまず、第一のトピック、「誘惑」の含意から始めよう。

「誘惑は決して自然の次元のものではなく人工の次元のものである。エネルギーの次元のものでなく、記号と儀礼の次元のものである。それゆえ、生産と解釈のすべての大きな体系は、その概念的な領域から絶えず誘惑を排除してきた。」（10）

「誘惑は、生産や欲望の秩序を含めて、神の秩序を破壊しようと待ち受けている。誘惑はまた、あらゆる正統性にとって、害悪や奸計、すべての真理を逸脱させる黒魔術、記号の陰謀、記号を呪術的に用いるときの高揚であろうとする。」（ibid.）

これらの引用のポイントは、以下の三点にまとめられる。

（1）誘惑は「記号と儀礼の次元」に属している。
（2）誘惑は「生産と解釈」の体系から排除される。
（3）誘惑は「秩序」や「正当性」を破壊する。

西欧の文化では、誘惑は宗教でも道徳でも哲学でも、「秩序」や「正統性」の原理を崩す力と見なされてきた。それでも、誘惑は18世紀まで生きながらえていたが、ブルジョワ革命によって「生産」の時代が始まると姿を消してしまう（9）。なぜなら、生産（production）は、誘惑の次元でうごめくものを「前へ（pro）押し出す（duire）」ことによって「物質化」するからである（55）。要するに、誘惑とは、「秩序」や「正当性」を支える真理への信仰や、「生産」や「解釈」を支える構築への意志を無効にし、それらを無意味にして、日常を非日常へ引きこむ呪力、つまり「儀礼」の次元を漂う記号である。

ボードリヤールは、ここに見るとおり、誘惑が何であるかを語るのではなく、それがどのように働くかを語ろうとする。それが何であるかを語ってしまえば、その表現は誘惑に意味を与えて、誘惑を「物質化」してしまうからである。「物質化」された誘惑、それは生産物としての欲望の記号にすぎなくなる。たとえばポルノでさえ、それが性の商品として「物質化」されているかぎり、誘惑とは無関係である。「ポルノの中に誘惑はない」（55）。誘惑とは、生産の意味を帯びた記号（言説）を無意味へ逆流（可逆）させ、その記号を抜け殻にしてしまう力をもつ無印の記号、記号の「零度」（43, 45）である。「すべての言説は、この突然の可逆性に脅

かされている。あるいは、意味の痕跡もなく、それ自体の記号の中へ吸収されてしまうことに。」(10)

意味から無意味への「突然の可逆性」によって死に晒された言説(「秩序」、「正当性」、「生産」、「解釈」)にできるのは、誘惑を「悪魔払いする」(ibid.)ことだけである。ボードリヤールはそれに続けて、読者にはなんの説明もないまま、序論の第二のトピック、「誘惑」と「女性的なるもの」の関係へ話を移してしまう。

「ここにおいて誘惑と女性性(féminité)は誤認され、常に混同される。すべての男性性(masuculinité)は、女性的なるもの(le féminin)の中でこの突然の可逆性に常につきまとわれてきた。誘惑と女性性は、性、意味、権力のまさに逆として避けることができない。」(ibid.)

ボードリヤールの文章がわかりにくいのは、論理が飛躍していることに加えて、このように、概念の定義と用法があいまいだからである[3)]。たとえば、本書では、「女性性」(féminité)と「男性性」(masuculinité)は対立概念として使われているが、「女性性」(féminité)と「女性的なるもの」(le féminin)は同義で使われる場合もそうでない場合もある。上の引用では、最後の一文に含まれる「女性性」は「女性的なるもの」でなければ筋が通らないので、「女性的なるもの」と同義で使われている。それを踏まえて、内容を整理しておこう。

「男性性」とは、たとえば「秩序」、「正当性」、「生産」、「解釈」によって代表されてきた原理、真理への信仰や構築への意志としてあらわれる原理、精神分析でいう「男性原理」にあたる。それに対して、「女性性」とは、「男性性」がそれを排除したり吸収したりすることによって自己を確立してきた反・原理、精神分析でいう「女性原理」にあたる。ボードリヤールは、こうした精神分析の「男性原理」と「女性原理」の設定、そして両者の区分そのものを言説として批判し、「女性的なるもの」という新しい概念を導入する。

「女性的なるもの」は「女性性」(女性原理)と別物であるどころか、「男性性」(男性原理)と「女性性」(女性原理)の対立を逃れて、そのどちらをも消滅させ、両者の区分を無効にする概念である。その意味で、「女性的なるものの中でこの突然の可逆性[消滅の危機]に常につきまとわれてきた」のは、「男性性」も「女性性」も同様である。ボードリヤールは、そうした「女性的なるもの」の働きを「誘惑」と重ねて、「この女性的なるものの力は誘惑の力である」(18)と言う。それゆえ、「誘惑」は「女性的なるもの」と同義であるのに、一般には、「誘惑」は「女性性」と「誤認され、常に混同される」。さらに、「誘惑」と「女性的なるもの」が「性、意味、権力」の「逆」になるというのは、「誘惑」と「女性的なるもの」が「突然の可逆性」を発揮して、「性、意味、権力」の言説から意味を消し去り、無=意味の状態へ引き戻す力になることを示している。

それでは、ここまでの説明を基にして、本論の解説へ入ろう。

*

『誘惑について』は三部から構成されている。第一部は「性の黄道」、第二部は「表層的な深

淵」、第三部は「誘惑の政治的運命」である。その内、第一部は、「誘惑」と「女性的なるもの」、「女性的なるもの」と「シミュレーション」、それに「誘惑」と「生産」の関係を説明している。最初に、前のセクションで説明したことを受けて、「誘惑」と「女性的なるもの」の関係をさらに詳しく見ていこう。

「フロイトは正しい。性現象（sexualité）もリビドーも一つしかない—男性的（masculine）なものである。性現象は、男根、去勢、父の名、抑圧を中心とする、この堅固で差別的な構造である。それ以外のものはない。」(16)

「この構造の内部で、女性的なるもの（le féminin）を線の向こうへ通そうとしたり、関係項を混ぜ合わせようとしたりしても無駄である。構造が変わらないので、女性的なるものがすべて男性的なるもの（le masculin）に吸収されるか、あるいは構造が壊れて、女性的なるもの、男性的なるものがなくなり、構造の零度になるかである。」(ibid.)

ボードリヤールの誘惑論は、方法として、フロイトの精神分析を批判しているところに特徴がある。その方法とは、「男性原理」によって成立している精神分析の構造を指摘して、そこから排除されてしまうものを抽出することである。これは、建物（精神分析）の構造上の特質（「男性原理」という大黒柱）とそれゆえの盲点を明らかにして、建物全体の確実性に揺さぶりをかけるという点で、脱構築という理論の基本例になっている。

フロイトの精神分析は、その建物の構造によって正当化されているので、「女性的なるもの」を「男性的なるもの」と融合させようとしても無駄である。前者が後者に吸収されるか、両者の相補性に介在していた力学が失われて、「構造の零度」の状態になってしまうからである。そこでボードリヤールは、「男性原理」と「女性原理」の二項対立を踏まえながら、それとは別のところに第三項を想定する。それこそ、彼独自のニュアンスを帯びた「女性的なるもの」にほかならない。（この第三項が「女性的なるもの」以外の用語であれば、概念の重複や誤解は防げただろう。）

「女性的なるもの（le féminin）は他のところにある。これまでも常に他のところにあった。そこにその力の秘密がある。」(17)

「[精神分析の] 権力と性の原理に取って代わるものは、おそらく実際には女性的なるもの（le féminin）の次元にある。但しそれは男性的／女性的という対立関係の外にあるものとして理解されるべきである。この対立関係は本質的に男性的であり、目的は性的であり、覆されると消えてしまう。この女性的なるものの力こそ、誘惑の力である。」(17-8)

フロイトの精神分析は「権力と性の原理」によって根拠を与えられている。たとえば、「男性的／女性的」という線引きさえ、権力の行使であるという点で「本質的に男性的」であり、それによって性を言説として生産（制度化）しているという点で「目的は性的」である。

他方、ボードリヤールの「女性的なるもの」は、「権力と性の原理」と関係もなければ、「男

性的」という概念の対立項でもなく、「男性的／女性的」という区分を超えたところで、その境界をあいまいにして、「男性的」と「女性的」という存在自体を消してしまう現象である。この「女性的なるもの」から、これまでの世界観を更新するための知の戦略が提示される。それこそ「誘惑」である。

「世界はもはや心的、心理的関係や、抑圧、無意識によってではなく、賭け、挑戦、決闘の関係、現象の戦略、つまり誘惑によって解釈されなければならない。世界はもはや構造や弁別的対立関係によってではなく、誘惑の可逆性によって解釈されなければならない。その世界では、女性的なるもの（le féminin）は男性的なるもの（le masculin）に対立せず、男性的なるものを誘惑するものになる。」(18)

ここでボードリヤールは、思想を転換するギアを入れる。つまり、世界は精神分析の方法によって解釈されるのではなく、それとは別の方法によって解釈されるべきである。その方法とは、「賭け、挑戦、決闘の関係、現象の戦略、つまり誘惑」、「誘惑の可逆性」に基づいている(ibid.)。ここから開かれてくる世界では、「女性的なるもの」が「男性的なるもの」を誘惑するという。これはどういうことだろう。

精神分析は、たとえば、人間心理を意識と無意識の関係によって説明し、精神世界を表層と深層の関係から成る構造として論証してきた。そうして、人間の心理が精神分析の言説によって形を与えられると、その過程に認められた無から有への変化（物質化）の流れを逆行させることはできなくなる。つまり、人間の心理はもはやそれ以外の方法で語られなくなり、あくまでそういうものとして認知され、真理として存在し続ける。ボードリヤールは、これを記号の「不可逆性」(69) と呼んでいる。

それに対して、「女性的なるもの」は、この「不可逆性」に忍びこんで、それを逆流させる記号である。たとえば、学問として成立している建物に隠された真理を逆流させて、学問というもの自体が存在しないことを知らしめること。つまり、言説の行使によって定着した記号の意味を逆流させて、無＝意味として溶解させること。それこそ「誘惑の可逆性」であり、「女性的なるもの」の効果である。

「誘惑は論証されたり、根拠づけられたりする必要はない。誘惑は、リアルとされるすべての深さ、すべての心理学、解剖学、真理、権力、そういうものの逆流の中にまさにある。誘惑は知っている（但しこれは秘密である）。解剖学も心理学もないことを。すべての記号は可逆的であることを。」(22)

「女性的なるもの」が誘惑として効果をもっとも発揮しようとすれば、「男性原理」と二項対立の関係を繰り返してはならない。そうなれば、「女性的なるもの」は「女性原理」と同一視され、「男性原理」にコントロールされて、その力を失ってしまう。それでは、「女性的なるもの」はどうしたらよいのだろう。そのヒントは次の引用にある。

「深さとしての男性的なるものに対立するのは、表面としての女性的なるものでは決してなく、表面と深さが不明瞭になったものとしての女性的なるものである。」(22)

「男性的なるもの」は、性の言説において「深さ」という記号を誇示する。他方、「女性的なるもの」は、その反価値として「表面」に追いやられて、そこで「男性的なるもの」と対立するように見える。しかし、そういうときでさえ、ボードリヤールの言う「女性的なるもの」は、第三項として、その関係を逃れている。「男性的なるもの」(より正確には「男性性」)が「表面」と「深さ」を区分する力であるなら、「女性的なるもの」は「表面」でも「深さ」でもなく、その区分をあいまいにする力だからである。

それはまた、このようにも表現されている。「男性的なるものは、真実性についての確実な区分と絶対の基準を知っている。男性的なるものは確実であり、女性的なるものは解決不能である」(23)。「男性的なるもの」(より正確には「男性性」)は、「女性的なるもの」の「解決不能」を掴みどころのないものと見て、それを「確実」へ取りこもうとする。しかし「女性的なるもの」は、「解決不能」を柔軟性として活かしながら、「男性的なるもの」のこわばりを解こうとする。それゆえ、「男性的なるもの」は抵抗し、「女性的なるものは誘惑する」(18)。

さらにボードリヤールは、「解決不能」という用語を介して、「女性的なるもの」と「シミュレーション」を結びつける。

「女性的なるものにおいては、真正なものと人工のものとの区別それ自体に根拠がないとする命題は、シミュレーションの空間をも規定する。シミュレーションの空間においても、リアルなものとモデルの間に可能な区別はない。現象としての女性的なるもの以外に女性的なるものがないのと同様、シミュレーションのモデルによって分泌される以外のリアルなものはない」(23)。

「女性的なるもの」と「シミュレーション」のアナロジーを解くキーは、「真正なものvs.人工のもの」と「リアルなものvs.モデル」という二項対立の重なりにある。「女性的なるもの」にとって、「真正なもの」とは「男性原理」であり、「人工のもの」とはそれから排除された原理である。他方、「シミュレーション」にとって、「真正なもの」とは「リアルなもの」、つまりオリジナルであり、「人工のもの」とは「モデル」、つまりオリジナルのコピーを増殖するための基本形である。それゆえ、「女性的なるもの」が「真正なもの」と「人工のもの」の区分を消し去るように、「シミュレーション」もまた、オリジナルでもコピーでもないハイパーリアルな記号を操作して、「リアルなもの」と「モデル」の区分を消し去ろうとする。

「この奇妙な一致から、女性的なるもののあいまいさが想起される。女性的なるものは、シミュレーションの徹底した証明であると同時に、シミュレーションを克服するただ一つの可能性である--まさに誘惑の中で。」(23)

「シミュレーション」がオリジナルとコピーの二項対立を超える記号の操作であるとすれば、「女性的なるもの」は、あらゆる二項対立を「あいまいさ」で逆流させ、溶解させることによって、つまり「まさに誘惑の中で」、シミュレーションの理想を実現する力になる。ボードリヤールの生産論と誘惑論がリンクするのは、ここにおいてである。

手で物をつくる前近代（産業革命までの時代）では、出来あがった物がオリジナルだった。機械で物をつくる近代（産業革命の時代以降）になると、人間はオリジナルを大量にコピーできる段階から、オリジナルとコピーの対立関係をコピー同士の等価関係へシフトさせる段階に入った。しかし、人間はその段階でも、「生産」という言葉で説明できる活動を続けていたと言える。それが急変したのは、コンピューターの発達でシミュレーション工学が飛躍的に進歩した20世紀後半に至ってからである。

いまやオリジナルも、オリジナルとコピーの対立関係も、コピー同士の等価関係も消滅して、現実そのものになった記号が自己増殖するように乱舞している。その意味で、現代とは「生産」が抹殺された時代である。その実行犯は、もちろんシミュレーションである。しかし「女性的なるもの」は、シミュレーションに残るオリジナルとコピーの余韻さえ消し去り、「生産」の殺害を完全犯罪にして、「シミュレーションを克服するただ一つの可能性」になる。

ボードリヤールにとって、生産とは、「別の次元、秘密と誘惑の次元にあるものを力によって物質化することである」(55)。つまり、生産は男性原理の象徴として、無から有への一方通行のプロセスとして規定される。「生産には可逆性がない」(68) とは、そういうことである。他方、「女性的なるもの」は有を無へ逆流させるという点で、「可逆性」への運動を生きている。その意味で、生産の死とは、生産の不可逆性を支えてきた男性原理が、「女性的なるもの」の可逆性への衝動（誘惑）によって生産以前の状態へ逆流させられることを示している。それゆえ、「誘惑はいたるところで、いつも生産に対立する」(55) し、「誘惑の力は常に生産の力を無効にする」(28)。

「すべての男性的な力は生産する力である。それ自体を生産するものはすべて、たとえそれが女性として自らを生産する場合でも、男性的な力の領域に入る。女性的なるものにとって唯一の、抑えられない力は、誘惑の逆向きの力である。誘惑は生産の力を無効にすることを除けば、それ自体では無であり無力である。」(ibid.)

それでは、生産が死ぬところには何が残るのだろう。「生産」のプラスが「誘惑」のマイナスによって相殺されたところ、そこには「空虚」(69) がある。「権力の背後、あるいは権力のまさに中心、生産の中心にあるのは空虚である」(ibid.)。しかしボードリヤールは、『監獄の誕生』や『性の歴史』を書いたフーコーでさえ、権力や性の生産に加担して、それを「背後から攻撃する」(73) こともなく、生産の死を迎えた現代のシミュレーション社会をとらえることはできなかったと批判する。

マルクスは「ヘーゲルは逆立ちしている」と唱えた。それに倣えば、ボードリヤールは逆立ちしたフーコーである。

「フーコーのテクストは、シミュレーションの中で権力を反転させるという仮説を立てることなく、権力の幻想を復活させたという点で非難されなければならない。」(73)

「権力の充満と性の充満に取り憑かれた全体に対して、空虚を問題にしなくてはならない。」(ibid.)。

「生産に見せられた全体に対して、誘惑を問題にしなくてはならない。」(ibid.)

*

誘惑は、生産の言説から意味を奪って、生産の真実を消してしまう。第二部「表層の深淵」では、そうした言説の最たる例として、フロイトの精神分析が改めて批判の対象になる。

「フロイトもまた誘惑を廃棄して、客観性と整合性のあらゆる特徴を有した、極めて操作的な解釈の機構、極めて性的な抑圧の機構を代置した。」(82-3)

フロイトは誘惑を捨てて、その代りに「性的な抑圧の機構」と「操作的な解釈の機構」を据えた。ここで「機構」と呼ばれているのは、たとえば、エディプス・コンプレックス、去勢不安、反復強迫、快楽原則、現実原則といったキーワードを構成要素とした、性の生産のためのメカニズムと言える。そこには、「客観性と整合性」を無効にする誘惑の入りこむ余地はなく、誘惑は「精神分析の忘れもの」(80) になる。ボードリヤールは、その「忘れもの」を拾った人物として、フランスの精神分析家、ジャック・ラカンを挙げる。

ラカンは、スイスの言語学者、フェルディナン・ド・ソシュールの発想を借りて、誘惑を「意味するもの」(記号を構成する要素としてのシニフィアン) と見なす。ソシュールの用法では、「意味するもの」とは、ある特定のものに名前を与えるラベルではなく、形を取る前の世界に線を入れて、何かをそれとして、つまり「意味されるもの」(シニフィエ) として浮かびあがらせる働きである。しかし、「意味するもの」と「意味されるもの」の間には揺らぎがあり、それゆえ「意味するもの」は、それを操作する者を脅かしながら、魅了する。しかしボードリヤールは、充分に説明しないまま、この「意味するもの」としてのラカンの誘惑を否定してしまう。

「ラカン的な誘惑は、たしかにまやかしである。しかしそれは、フロイト独自のまやかし—科学ではない科学のために、形態／誘惑を排除してしまうまやかし—をそれなりのやりかたで修正し、修復し、償っている。精神分析の誘惑的実践を一般化するラカンの言説は、この排除された誘惑に復讐する。但し、それ自体、精神分析の悪影響を受けたやり方で。つまり、常に(象徴的なるものの) 法の支配下で。」(83)

ボードリヤールは、ラカンがフロイトの「忘れもの」としての誘惑を見直し、フロイトの「まやかし」を是正したことを評価しながらも、それが「(象徴的なるものの) 法」に支配されている点で、やはり「まやかし」であると言う。「象徴的なるもの」とは、大文字の「主人」(ibid.

他者としての父なるもの）であり、それは主体（自己としての子なるもの）に先行して、主体を形成すると同時に拘束する。そこに働く規律の力こそ「法」である。その意味で、ラカンもまた精神分析の言説を受け継ぐことによって、「法」という権力を頼りにしながら、精神分析にひそむ生産への志向に加担していたことになる。

しかし、ボードリヤールの批判は、もっと簡単に、ラカンが誘惑を「意味するもの」と規定して、「意味」の生成という生産の原理（象徴原理）から離れられなかった点にある、と説明できるだろう。ボードリヤールにとって、誘惑は決して「意味するもの」ではなく、それ自体では無として、意味を生みだそうとするすべての言説から意味を消し去るものだからである。そのことは、ボードリヤールがソシュールの後継者たちを批判して、「彼らは、言語の深淵、言語の誘惑の深淵、意味の生産という考えではなく、まったく異なった意味の吸収作用という考え方を決して思いつかなかった」（82）と論じているところからも傍証される[4]。

他方、精神分析の言説は、「意味の吸収作用」としての誘惑を斥けることによって、その正当性を温存しようとした。しかしそれは、真理がどこにもないことを隠すための方法でもあった、とボードリヤールは言う。誘惑は真理を覆うヴェールであるが、真理は実在しているのではなく、ヴェールに隠されたものとして存在しているにすぎない。しかし、ヴェールを取り去ったところで、そこには何も存在しない。これは聖像破壊者（イコノクラスト）が陥るワナである、とボードリヤールは指摘する。

「神の真理を輝かせるために、あらゆる仮象を追い払うのは、聖像破壊者の幻想だった。というのは、神の真理は存在せず、おそらく聖像破壊者たちもそのことを密かに知っていたからである。」（85）

ボードリヤールはさらに、「ヴェールを外したとき、真理が真理のままであるとは考えられない」（ibid.）というニーチェの言葉を引用する。つまり、真理の出現と消滅のキーを握るのは、真理そのものではなくヴェールにほかならない。

「仮象の背後に神が存在するわけではない。そして、仮象に覆われた虚無そのものは、秘密のままにしておかなくてはならない。想像上のすべての優れた装置の誘惑、魅惑、〈美的な〉輝きがここにある。」（130）

ヴェールは、不在の真理を隠すことによって真理を実在させ、その事実を隠すことによって真理の「輝き」を演出する。しかし同時に、ヴェールは真理の隠れ蓑として、真理を「虚無」へ返し、真理の実在を疑わせる力をもっている。ボードリヤールにとって、このからくりを暴く典型となるのが、だまし絵である。だまし絵は、絵のフリをしながら、絵を成立させている原理の不在を描くことによって、その原理を疑わせるからである。その意味で、だまし絵とは「空白の記号、空虚な記号」（86）になっている。

「それらの記号は、静物画のように親しみのある実在を描かず、政治的秩序に対してするように、一つの空虚、一つの不在、つまり一枚の絵画の諸要素に秩序を与えるすべての形象的ヒエラルキーの空虚、不在を描く」(86-7)。

ボードリヤールは、その例として、紀元前5世紀のギリシャの画家、ゼウクシスが描いたぶどうの絵を紹介する。その絵はあまりにも本物に似ていたので、鳥がつつきに来たという。それが描いているのは、実在のぶどうではなく、実在の「空虚」、深さの「不在」である。そこにあるものに触れようとして、触れることもできず、突然に開いた深さのない穴に落ちるショックに「めまい」(90) を覚えること。ゼウクシスのぶどうの絵は、絵の「ブラックホール」(89) として、いわゆる現実が深さという原理によって保証された擬制であることを告げ、その原理によって成立している世界を終わらせる。それこそ、「だまし絵の実験的なハイパーシミュレーション」(90) が与える効果である。

「だまし絵においては、実在と同一になることではなく、賭け、策略をしっかり意識してシミュラークルを生むことが重要である。つまり、第三の次元をまねることによって、その第三の次元の現実性を疑うこと、実在の効果をまねし、超えることによって、現実原則を徹底して疑うことが重要である。」(ibid.)

このだまし絵の効果は、絵画ばかりでなく、建物にも適用されている。ボードリヤールによれば、それを「空間の誘惑」(92) として利用しながら、世界の中心が穴であることを示したのが、15世紀のウルビーノ公、フェデリーコ・ダ・モンテフェルトロの宮廷である。その大広間の空間の真ん中には、なんとだまし絵による聖壇がある。この聖壇のアレゴリーは、ウルビーノ公の宮廷ばかりでなく、ウルビーノ公国もまた、空虚の中心によって空間の秩序と政治の権力を与えられていることを示している。それゆえモンテフェルトロは、この仮説を「もっとも厳しい秘密」(93) として守らざるをえなくなる。そこにこそ「彼の権力の秘密」(ibid.) があるからである。その意味で、だまし絵による聖壇は、ウルビーノ公の宮廷と公国にとって、「現実の穴」(94)、「現実の中心に隠されている精密なシミュラークル」(ibid.) として、真理の秘密、真理への挑戦になる。誘惑が「秘密と挑戦」(109) に結びつくのは、ここにおいてである。

「マキャヴェリ以来、政治家たちはおそらくいつも、このことを知っていたのだろう。彼らの権力の根源にはシミュレーション化された空間の支配があり、政治は実在する一つの機能や一つの空間ではなく、シミュレーションのモデルであって、その明白な行為は実現された効果にほかならないことを。」(93-4)

但し、誘惑の挑戦は、権力を外から倒すところにあるのではなく、意味を帯びた記号と結託して、その内をめぐり、その意味を衰えさせ、死に至らしめるところにある。「誘惑の根底に

あるのは、記号の集積でも、欲望のメッセージでもなく、記号の吸収における秘教的な共犯性である」(109)。この挑戦を可能にしているのが、記号の意味を無＝意味へ転じる空虚としての秘密である。それゆえ秘密とは、「意味をもたないので語られないものや、たとえ循環していても語られないものの誘惑的で秘儀的な性質」(109) であり、誘惑とは、この「秘密の循環」(110) である。ボードリヤールは、こうした誘惑による「完全犯罪のシナリオ」(137) を表現した作品として、デンマークの哲学者、セーレン・キルケゴールの『誘惑者の日記』(1843年) に注目する。

この作品は、ヨハンネスという男がコーデリアという少女と出会ってから、愛をめぐる駆け引きによる紆余曲折を経て婚約し、それに満足することなく、相手から解消させるかたちで婚約を破棄するに至るまでを描いた物語である。その意味で、これは、ナルシストの男のひとりよがりと思える愛の独占欲を夢想として描いた作品に見える。しかしここに表現されていることは、そうした世俗の解釈の網をかいくぐり、すり抜け、ズレを繰り返し、循環する。当のヨハンネス自身も、「この事件全体が虚構の運動にすぎない」(『誘惑者の日記』149) と書いている。その点で、『誘惑者の日記』とは、『誘惑について』と同様、誘惑の意味を虚構によって伝えるのではなく、誘惑という現象を記号の運動として感じ取らせる作品である。

ヨハンネスは、手練手管を労してコーデリアをワナに陥れる。相手の虚栄心をそそり、優越感を覚えさせ、その裏をかくことで、恥を知らしめること、相手により深く傷を負わせるために相手をより深く愛すること、相手に目覚めた情熱を、それが目覚めた瞬間にぶちこわしてしまうこと、娘の肉体を所有するのではなく、娘との関係を芸術のレベルで享楽すること、相手に婚約を破棄させて、精神の次元を高めさせること。『誘惑者の日記』は、これらの変化を誘惑の記号の流れとして繰り広げることによって、読者を辟易させながらも魅了する。

この作品では、事はすべてヨハンネスの計算どおりに進んでいくように見える。しかし、ヨハンネスとコーデリアの関係を変化させているのは、ヨハンネスの作戦というより、偶然による記号のあらわれの繰り返し、つまり「秘密の循環」としての誘惑である。「誘惑するというのは、さまざまな形象を相互に運動させることであり、それらの形象の間で、それ自体のワナにかかった記号を運動させることである」(141)。ヨハンネスはただサイコロを振り続けるだけであって、どういう目（記号）が出るのかわからない。彼にできるのは、その偶然に賭ける喜びを覚えることだけである。

ボードリヤールが着目しているのも、まさにその点にほかならない。「そこに誰かの戦略があるわけではない。これは宿命であって、ヨハンネスはそれを実行する道具でしかなく、それゆえ失敗することはない」(137)。『誘惑者の日記』が「完全犯罪のシナリオ」と呼ばれているのも、そのシナリオを書いているのが人間の主体ではなく、誘惑の記号の流れに介在している「宿命」だからである。ヨハンネスは、その「宿命」に従って、誘惑による「完全犯罪のシナリオ」を演じていく。そこに具現される誘惑とは、ドンファンのように、相手を性的に支配して、快楽にふけることではなく、戦略を更新して、相手との関係を揺さぶりながら、「女性の豊穣の力」(138、「原始性」65、「少女の無限の豊かさ」72、「優美さ」96、「女らしさ」100、「他者のための存在」269, 273、「純潔」298) を高め、それに挑戦し、その力を奪うことである。

ヨハンネスはこれを実現するために、「省略、否認、消去、逸脱、失望、派生」(147)、さらには、「イロニー」、「警句」、「婉曲」、「屈折」、「変形」(157) という方法を取る。ボードリヤールの説明不足を補って言えば、これらのレトリックはすべて、ヨハンネスとコーデリアの間で飛び交う記号の意味を固定するのを避けるように、記号から意味を滑らせ、記号を宙づりにする。その結果、両者の心理が、たとえば、欺き、あせり、つれなさ、優越感、当惑、恥じらい、負い目、希望、あこがれといった特定の意味に回収されようとする、まさにそのとき、「記号はその軌道を外れて、元へ戻る」(147) ように仕向けられる。これを戦略として利用し、歓喜と失望の混ざり合っためまいを引き起こす者、ボードリヤールはそれを「誘惑者」と呼ぶ。

「誘惑者は、記号を浮遊させておくことができる者である。彼は、記号を宙ぶらりんの状態にしておくのが好ましいこと、それが運命の方向へ向かうものであることを知っている。彼は、すぐに記号を消尽せず、記号が相互に反応し、めまいと失望のまったく特殊な結合が生じる時を待つ。」(149)

ボードリヤールの誘惑論は、先行者たちの思想の基本形をなぞりながらも、独特のニュアンスを帯びている。たとえばフリードリッヒ・ニーチェは、解釈を「権力への意志」(『権力への意志』134) と見なし、西洋における最大の意味の死を「神は死んだ」(『悦ばしき知識』199, 367) と表現した。ジョルジュ・バタイユは、意味に回収されないもの、有用性や合理性という枠から溢れるものに着目し、それを「呪われた部分」(『呪われた部分』48) と表現した。ボードリヤールは、このどちらとも違って、ヨハンネスと同様、意味になろうとする記号をズラし、すかし、ねじり、裏返し、なぞり、茶化しながら、記号とたわむれ、意味を衰えさせる効果に誘惑を見て、それを運動として提起した。そこにボードリヤールの評価できる点はあるだろう。

他方、ボードリヤールには意味と無意味の二項対立にとらわれすぎた面があり、彼の誘惑という概念は、意味の生産性を乗り越える運動として、ヘーベルの弁証法をなぞっただけのように見えてしまう。たとえば今村仁司は、「ボードリヤールはちょうど、デリダが警戒したまずいかたちでの二項対立的な批判、意味にたいして非意味を対置するようなスタイルを取りすぎているということです」(『誘惑論序説』104) と語っている。しかし、ボードリヤールは意味を内から、その動きに合わせて崩していく方法を強調することによって、誘惑とはそれ自体は無で、意味のあるところにあらわれ、それを逆流させる脱構築の作用であるとした点で、二項対立のワナから逃れているとも言える。

但し、たとえそうであったとしても、『誘惑者の日記』に関するボードリヤールの説明は、根本のところで、やはりもの足りないものを含んでいる。たとえば、この作品における誘惑は、ヨハンネスが「女性の本質」(269, 273, 298) として「女性の豊穣の力」を前提とし、その本質主義（意味にまつわる最大の言説の一つ）を信じたからこそ成立した言説である。この点については、ボードリヤール自身もヨハンネスと同様、それに触れようとしなかった。もちろん、それに触れれば、『誘惑者の日記』は作品として成立しなくなり、「誘惑者」も消えてしまう。

しかし、そういう視点に立たなくとも、「誘惑者」は実のところ、作品の最後で消えていた可能性もあるのだが、ボードリヤールはその点についても明言を避けている。

『誘惑者の日記』の序には、コーデリアの手紙が三通、ヨハンネスの日記に先んじて置かれている。これらはすべて、二人が婚約を解消したあとに書かれたものである。その一節には、こう記されている。「わたくしはあなたのものです、あなたのものです、あなたのものです」(32)。ここでのコーデリアは、「女性の豊穣の力」を奪われて、ヨハンネスに従属し、あたかも所有されたかのようである。しかし、ヨハンネスにとって、コーデリアがすべてを捧げてくれることは、誘惑の成就をもたらすと同時に、彼女から「香気」(298) を奪って、誘惑を可能にしていた「抵抗」(ibid.) を失うことでもある。なぜなら、コーデリアは自己を捨てることによって、存在の不在、つまり空虚になるからである。ちょうどウルビーノ公の宮廷と公国が、だまし絵の聖壇という空虚によって空間の秩序と政治の権力を与えられていたように、ヨハンネスの誘惑は、その極限において、コーデリアという空虚を中心として達成されたことになる。

但し、これはまた、ヨハンネスの誘惑もコーデリアの空虚に吸収されることを露呈すると同時に、誘惑者としてのヨハンネスが死ぬことを示唆している。ヨハンネスは、それを「秘密」として守らざるをえなくなる。しかし彼の誘惑者としての死は、作品の冒頭に置かれたコーデリアの手紙によって、すでに告知されていたわけである。コーデリアは、「わたくしはあなたのものです、あなたのものです、あなたのものです」に続けて、こう書いていたはずである。わたくしは、「あなたの呪いです」(32)。意味は誘惑に呪われ、誘惑は空虚に呪われる。

しかしコーデリアはまた、こうも書いていたはずである。「むかし、ひとりの貧しい少女がありました、彼女は愛だけしかもっていませんでした」(33)、「でもきっと、あなたがあなたのコーデリアのもとに帰ってくださる日がくるでしょう」(34)。これは何を意味するのだろう。誘惑の実現、誘惑の失望、誘惑への希望、それとも虚無の誘惑。ボードリヤールは、この表現の不確定性にこそ、『誘惑者の日記』における誘惑の「運命」があることを語り損ねている。

*

『誘惑について』の第三部「誘惑の政治的運命」は、ここまでの『誘惑者の日記』の議論を受けて、誘惑を法と規則という観点からとらえ直している。キーとなるのは、第三部の冒頭に置かれた次の一節である。

「『誘惑者の日記』が語っているのは、誘惑の中には戦略の主体は存在しないこと、そしてこの戦略は、その手段を充分に意識して展開されるときでも、それを超えるゲームの規則になおも従属していることである。法を超えた儀礼的ドラマトゥルギーである誘惑は、賭けであると同時に運命であり、それゆえ、その主人公たちを、彼らを結びつけている規則に違反することなしに、避けることのできない終末へと向かわせる。」(179)

ここでボードリヤールは、誘惑をゲーム、誘惑する者とされる者をプレーヤーと見なして、記号学のモード、ポストモダニムズのモードからゲームのモードへ思想の回路を切り替える。

上の引用のポイントを整理すると、こうなるだろう。

（1）誘惑の戦略に主体はない。
（2）戦略は規則に基づいている。
（3）規則は法を超えている。
（4）誘惑は賭けであり運命である。
（5）プレーヤーは賭けと運命に身を任せる。

誘惑というゲームでは、プレーヤーは、慣例を忠実に守り、サイコロを振り続けて、サイコロの目の出方に従うというルールに導かれるしかない。それが誘惑の「規則」であり、それゆえ「規則」は、「恣意的な記号」、「慣習としての手続きの循環と反復」、「可逆性的なサイクル」、「無目的」、「めまい」、「儀礼的情熱と強度」を特徴とする（179-81）。

他方、このプレーヤーの動きは、秩序を支配する「法」によってチエックされ、裁かれる。それゆえ「法」は、「必然的な記号」、「不可逆的な連続性」、「審級」、「禁止と抑圧」、「直線的で終わりのある連鎖」、「限定された目的」、「解釈と解読による正当化」、「意味の快楽」、「遵守と侵犯に伴う享受」を特徴とする（ibid.）。

「規則」は記号操作のルール（サイコロを振るという儀式の手続き）として、記号の意味（サイコロの目）への信頼を「気化」（182）させると同時に、予測もできない記号の出現（サイコロの目の出方）によってめまいをもたらす。プレーヤーは、このルーティンを「規則」として選択することによって、「法」の拘束から逃れる。「儀礼の記号は、我々を意味から解放する」（188）。その点で、「規則」は「法」より平等であり、自由である（187）。但し、その平等や自由を得たければ、プレーヤーは、習慣化された手続きによって儀礼を進行させ、偶然の流れを宿命として引き受けなければならない。「賭けに入ることは、義務の儀礼的な体系に入ることである」（182）、「慣例の記号、儀礼の記号は、義務としての記号である」（188）とは、そのことである。

「法」は必然に支配され、それゆえ禁止も侵犯も伴っている。しかし、「規則」は儀礼による偶然の流れを保証しているので、禁止も違反も意味をもたない。それゆえ、「法に対立するのは、法の不在ではなく規則である」（180）。たとえば、「規則」は「法」の正当性を危うくするどころか、「正当性」という言葉の意味そのものを不能にする。「法」は、そこに「規則」の不道徳を見ようとするが、「規則」は「不道徳」という言葉の意味を含めて「法」に挑戦する。ボードリヤールは、これを「生産の秩序」と「物の秩序」に対照させながら説明し、誘惑論と消費社会論を一挙にリンクさせる。

「賭けは、生産の秩序を誘惑の秩序に置き換えるので不道徳である」（197）。

「賭けで大もうけする魅力は、金銭の魅力ではない。それは、等価の法則を超え、交換の契約の法則を超えて、物の秩序の誘惑の回路という、直接的で極度のせり上げの、別の象徴的な回路と再び結びつくことである。」（195）

ボードリヤールにとって、「法」は「生産の秩序」であり、「規則」は「誘惑の秩序」である。「生産の秩序」とは、上の引用で言えば、等価交換への意志であり、交換の契約への信頼である。しかし、「賭け」（ゲーム）は「規則」によって起動し、そうした経済原理や人間理性の法則に代えて、「物の秩序」を「誘惑の回路」として設定する。「物の秩序」とは、物が記号の差異と化して、その関係性から価値を帯び、それを欲望のネットワークとして繰り広げる現代消費社会の秩序のことである。つまり、秩序の優先権が「法」から「規則」へ移るということは、物が実在としての価値をもつ「生産の秩序」から、記号同士が差異によって価値を乱反射させ、欲望を増殖させるシミュレーションの「誘惑の秩序」、つまり消費の象徴秩序への変化を示している。

ボードリヤールは、この変化を見事にパロディにした寓話として、ホルヘ・ルイス・ボルヘスの「バビロンのくじ」を取り上げる。バビロンの社会では、普通のくじが人気を失ったので、高額の罰金を払うくじを混ぜることにした。その結果、大金持ちになる者も入れば、手足を切断されたり、殺されたりする者も出てくる。民衆はそのリスクに熱狂し、バビロンはめまいの渦と化していく。世界の秩序は、社会の「法」によってではなく、くじというシミュレーションの「規則」によって論理づけられ、世界の実在は「巨大なシミュラークル」（206）、つまり一つ一つのくじが生み出す記号としての運命の体系になる。

ボルヘスの「独創性」（207）は、「法」の「生産の秩序」が「規則」の「誘惑の秩序」によって乗っ取られる状況を世界全体のレベルにまで押し広げ、社会の構造と人間の運命が偶然の不確実性によって決定されることを表現した点にある。もしバビロンの社会が現代の消費社会を予見しているとすれば、私たちの世界の秩序は、もはや「法」ばかりでなく「規則」も超えて、それらとは別の「規準」（211）、つまりシミュレーションのモデルによって支配されている。ボードリヤールは、1979年の段階で、それをすでに以下のように図示して見せた。空欄の「???」には、何が入るのだろう。運命、偶然、増殖、交流、遊戯。私たちには、いまでも「それを示す言葉さえない」（ibid.）。

法	規則	規準
社会	儀礼	???

21世紀の世界では、情報の媒体はデジタル信号のネットワークへ拡散し、生命の誕生も「遺伝子コードのマトリックス」（230）に還元される。確実性も全体性も身体性も、シミュレーションによって実体としての感触を消されながら、サービスであれ、環境であれ、誘惑の記号になろうとしている。しかし現代人は、ボルヘスのバビロニア人のように、誘惑の「無＝意味」の魔法にめまいを覚えることも熱狂することもない。誘惑それ自体にしても、ボルヘスのくじのように、社会や世界の全体をマヒさせるものはなく、誘惑の記号はすべてヒマつぶしの娯楽、あるいは束の間の刺激として、「魅了」（fascination, 213）のレベルへ堕している。ボードリヤールは、その状況を見透かしたように、「我々の社会は誘惑のない社会である」（210）と説き、そういう社会の中で衰弱してしまった誘惑を「クールな誘惑」（213, 220, 221）と呼んだ。

「これが誘惑の運命だろうか。あるいは、この退行した運命に逆らって、運命としての誘惑に賭けることができるだろうか。運命としての生産か、それとも運命としての誘惑か。」(245)

いまや「誘惑」という言葉自体が、その意味を溶かして、ノスタルジーを帯び始めている。私たちはもはや「誘惑」の消滅に誘惑されることに賭けるしかないのだろうか。それを「誘惑」の運命として、あるいは現代人の運命として。

注

1) ボードリヤールの翻訳は、原典から新たに訳した。
2) 今村仁司は、ボードリヤールの難解さに苛立ちを隠さない。「どんなに文学的に語っていただいても結構ですが、平易に理論的な筋道をたててもらわないとちょっと僕には理解できません」(『誘惑論序説』、112)。本稿は、これを逆説として利用した、ボードリヤールの「文学的」読解である。
3) ボードリヤールの女性論に関する批判者には、たとえば、Douglas Kellner、Jane Gallop、Luce Irigaray、Sadie Plant、Suzanne Moore がいる。(Victoria Grace, 161)
4) 但し、ボードリヤールがソシュールを誤解して「意味の消滅」を解いた経緯は無視できない。(『シミュレーションの時代』、211-8)

参考文献、引用文献

ジャン・ボードリヤール『シミュラークルとシミュレーション』(法政大学出版局、1984年)
_____『象徴交換と死』(筑摩書房、1982年)
_____『誘惑の戦略』(法政大学出版局、2004年)
_____『誘惑論序説—フーコーを忘れよう—』(国文社、1984年)
ジョルジュ・バタイユ『呪われた部分』(二見書房、1991年)
セーレン・キルケゴール『誘惑者の日記』(筑摩書房、1998年)
蓮實重彦『「赤」の誘惑—フィクション論序説』(新潮社、2007年)
フリードリッヒ・ニーチェ『悦ばしい知識』(筑摩書房、1993年)
ボードリヤール・フォーラム編『シミュレーションの時代』(JICC 出版局、1982年)
Baudrillard, Jean. *De la Séduction*. Paris: Editions Galilée, Paris, 1979.
_____ *Forget Foucault*. New York: Semiotext(e), 1987.
_____ *L'echange Symbolique et la Mort*. Paris: Gallimard, 1976.
_____ *Oublier Foucault*. Paris: Editions Galilée, 1977.
_____ *Seduction*. Trans. Brian Singer. New York: St. Martin's P, 1990.
_____ *Simulacra and Simulation*. Trans. Seila Faria Glaser. U of Michigan P, 1994.
_____ *Simulacres et Simulation*. Paris: Editions Galilée, 1981.
Butler, Rex. *Jean Baudrillard*. London: SAGE Publications, 1999.
Grace, Victoria. *Baudrillard's Challenge: A Feminist Reading*. London: Routledge, 2000.
Smith, Richard G. Ed. *The Baudrillard Dictionary*. Edinburgh: Edinburgh UP Ltd, 2010.

(原稿受理日　2013年3月4日)